

二〇二六年度

日本近世文学会秋季大会

大会プログラム

研究発表要旨

シンポジウム要旨

期日
会場

十一月十四日（土）・十五日（日）・十六日（月）
京都産業大学
〒603-8555 京都府京都市北区上賀茂本山

日本近世文学会秋季大会のご案内

会員の皆様にはますますご清栄のことと存じます。

二〇二六年度日本近世文学会秋季大会を開催いたしますので、ご案内申し上げます。

左記の案内と学会ホームページに掲載の大会案内とをご確認いただき、お申し込み下さい。

記

◆参加の手続き

- ・参加の申込と参加費・懇親会費・二日目弁当代の支払は、Peatixまたは郵便振替をご利用ください。
- ・申込と支払の締切は十月二十三日（金）です。Peatixでの申込は同日十三時締切です。
- ・参加費は千五百円、懇親会費は一般七千円（大学院生・学部生三千五百円）、二日目弁当代は千五百円です。

【Peatixでの申込・支払】

以下のURLまたはQRコードからアクセスしてください。

URL : <https://2026-autumn.peatix.com>

【郵便振替での申込・支払】

郵便局備付の振替用紙に金額の内訳と参加日を明記してお支払ください。

振替番号・加入者名 ○〇一六〇一一一〇二八二三 日本近世文学会

◆領収書・出張依頼状

- ・学会印の入った領収書が必要な方は、学会事務局へご連絡ください。Peatixをご利用の場合、システム上で領収書の発行が可能です。

- ・出張依頼状が必要な方は、氏名・職名・提出先・出張期間を明記し、学会事務局へご連絡ください。



◆大会三日について

- ・対面形式で開催します。オンライン中継はありません。
- ・会場受付で資料集をお渡しします。不参加の方への資料集の郵送はいたしません。
- ・会場受付で託児料金補助申請書を配付します。必要な方はお受け取りください。
- ・大会二日目（十一月十五日）日曜日の昼食に弁当を用意いたしますので、ご希望の方は前記の通り、お申し込みください。
- ・大会三日目の文学実地踏査は、会場にて資料を配付しますので、各自・各グループでお回りください。

日本近世文学会秋季大会会場校代表 盛田 帝子（京都産業大学）

メールアドレス：conf@kinseibungakukai.com

日本近世文学会秋季大会実行組織

飯倉 洋一（大阪大学名誉教授）

加藤 弓枝（名古屋大学）

雲岡 梓（京都産業大学）

佐藤 至子（東京大学）

浜田 泰彦（佛教大学）

日本近世文学会事務局代表 福田 安典

〒112―8681 東京都文京区目白台二一八一

日本女子大学文学部 福田安典研究室内

メールアドレス：info@kinseibungakukai.com

大会プログラム

【会場】 京都産業大学 天地館三階

【行事】

第一日 十一月十四日（土）

委員会（一・一五〇～一・三一〇） 委員会会場 T三〇六教室

大会受付（一・二・三〇）

開会（一・三・三〇）

研究発表会（一・三・四〇～一・四・五〇） 研究発表会会場 T三〇三教室

1 伊丹椿園『怪異談叢』の検討——近世における怪談を視座に——

2 曲亭馬琴・柳亭種彦合巻における同一プロットの反復

シンポジウム（一・五・〇五～一・七・四〇） シンポジウム会場 T三〇三教室

「文学史」の可能性——十七世紀を端緒として——

趣旨説明

一、混沌とした小説

二、和歌史の近世前期

三、中近世移行期の社会における連歌俳諧史の動態

四、〈エッセイ〉の時代——十七世紀文学論の一側面——

五、総合討論

懇親会（一・八・〇〇～二・〇・〇〇） 懇親会会場 天地館一階

コーディネーター 京都産業大学 盛田 帝子

早稲田大学名誉教授 中嶋 隆

京都女子大学 大谷 俊太

山口大学 尾崎 千佳

九州大学 川平 敏文

コメンテーター 豊橋技術科学大学 中森 康之

司会 大阪大学名誉教授 飯倉 洋一

大阪大学（院） 加藤 のん

東京大学（院） 杉村 真侑

第二日 十一月十五日(日)

大会受付(九・〇〇)

研究発表会 午前の部(九・三〇～一二・〇五) 研究発表会会場 T三〇三教室

京都大学(非) 川崎 蓉子

3 一人称代名詞から見る『南総里見八犬伝』——犬江親兵衛を中心に——

神戸大学 有澤 知世

4 鐫木清方と山東京伝——近代の画家による京伝受容——

5 「人情噺」の成立

東京大学(院)・日本学術振興会特別研究員(DC)

菅野 竣介

6 故三馬門人勝亭三遊作『滑稽花の縁』について

二松学舎大学 吉丸 雄哉

昼休み(一二・〇五～一二・一五)

編集委員会会場 T三〇五教室

研究発表会 午後の部(一二・一五～一六・二五) 研究発表会会場 T三〇三教室

7 初期の『和漢朗詠集』版本——春日政治・和男文庫本(九州大学附属図書館蔵)について——

熊本学園大学 村上 義明

8 『伊勢参宮名所図会』諸本における板本分割所有の痕跡

信州大学 速水 香織

9 『浄瑠璃物語』考——中京大学図書館蔵本を中心に——

早稲田大学演劇博物館招聘研究員 深谷 大

10 宝暦期における京都の歌舞伎に関する考察——本居宣長『在京日記』を資料として——

奈良学園大学 川端 咲子

11 『野郎ひなかつた』(推定) 復元考——雛形と野郎評判記——

同志社女子大学名誉教授 廣瀬千紗子

閉会(一六・三五)

第三日 十一月十六日(月)

文学実地踏査 会場にて資料を配付します。

研究発表要旨

伊丹椿園『怪異談叢』の検討

——近世における怪談を視座に——

大阪大学(院) 加藤 の ん

伊丹椿園『怪異談叢』(安永一〇(二七八二)年刊)は、五卷五冊からなる、中国怪談の翻訳集である。従来は、翻訳作品であるが故に独創性に欠けるとされ、研究の俎上に載せられなかった。

例えば、本作では、各話に『宣室志』をはじめとする原話の出典が明記され、翻訳作品であることを強調する。しかし、それらは類書である『太平広記』にも見出され、原話より『太平広記』を参照した可能性が高い。本作のこのような翻訳姿勢は、中国の怪談を受容する過程において『太平広記』が大きな役割を果たしたことを示す一例と言える。

一方で、本作は版元の意向によって製作されたという点も考慮すべきである。題辞では、本作が浪華の書肆成菌堂主人の求めに応じて執筆され、林羅山『怪談全書』の続編として企画されたと述べられる。成菌堂は、『怪談全書』の再版も担った書肆であり、本作の出版には版元の意向が大きく反映されていると考えられる。さらに、江戸・大坂の複数の書肆が出版・売出

に寄与していたことも確認でき、中国怪談翻訳集に対する一定の需要が存在していたことを示している。

以上を踏まえ、本発表では、収録作品と原話との関係、および出版事情について検討し、本作を、近世怪談史の中に改めて位置づけたい。

曲亭馬琴・柳亭種彦合巻における同一プロットの反復

東京大学(院) 杉村 真 侑

合巻の構成については、鈴木重三氏により時代・世話の二元性混淆が指摘されている(「合巻について」)が、プロットを反復する構成についての分析は十分でないと考えられる。

曲亭馬琴作の合巻『敵討身代利名号』(文化五年刊)では(お告げの的中)、同『行平鍋須磨酒宴』(文化九年刊)では(偽の裏切り)、柳亭種彦作の合巻『三虫搦戦』(文政二年刊)では(道理に反した殺人の罪滅ぼし)、同『浮世一休廊問答』(文政五年刊)では(身替りの死)のプロットがそれぞれ二度繰り返される。『敵討身代利名号』では二つの(お告げの的中)が独立して語られるが、『行平鍋須磨酒宴』『三虫搦戦』『浮世一休廊問答』ではプロット同士が因果関係で結び付く形式へと変化している。

中尾和昇氏(『馬琴読本の様式』)は、文化五年刊の馬琴読本『括頭巾縮緬紙子』(『三七全伝南柯夢』)において二つの「離別と邂逅」が入れ子構造になっており、二つの離別と二つの邂逅がそれぞれ緊密な関係を持ち、それらが「怨霊の発生と消滅」という主題に密接に関わると指摘する。馬琴は、文化期の読本において、同時期の合巻の構成にも用いた同一プロットの反復を、より複雑に使用しているといえる。また、種彦は『浮世一休廊問答』で山東京伝作の読本『本朝酔菩提全伝』(文化六年刊)を典拠に使用しつつ、「身替りの死」の反復を取り入れて独自の物語を創作したと考えられる。

一人称代名詞から見る『南総里見八犬伝』

——犬江親兵衛を中心に——

京都大学 (非) 川崎 蓉子

『南総里見八犬伝』には、特徴的な人称代名詞が散見する。各論として、二編の拙稿「馬琴の作品に見られる自称「ワクラ」」(『国語国文』第九四巻第四号、二〇二五年四月)、「『南総里見八犬伝』の一人称「ワナミ」」(『武蔵野文学』七三号、二〇二五年二月)において、一人称代名詞「ワクラ」が君臣関係で、「ワナミ」が秩序や上下関係が曖昧な状況下で用いられることをすでに指摘した。本発表では、それらの総論として、

一人称代名詞の観点から改めて『八犬伝』を読み直し、作者の意図や工夫を明らかにすることを試みる。

『八犬伝』全体での用例数は、前半は「ワナミ」、後半は「ワクラ」が多く、八犬士が里見家に集合する場面を含む第九輯下帙中で逆転している。その直前、里見家家臣の犬江親兵衛が主君の不興を買って一時的に里見家を離れる場面(第九輯下帙之上)では、親兵衛の一人称として「ワナミ」が多用される。これは八犬士の集結の前にして、先に家臣となった親兵衛を、あえて一度流浪の身、すなわち「ワナミ」を用いるべき属性の人物とし、この時点でまだ浪人である他の犬士と、同じ立場に置く意味があつたといえ、結果として「ワクラ」が多用される八犬士集結後との対比が明確になる。

馬琴は、『八犬伝』においてそれぞれの人称代名詞に意味・属性を持たせ、それらを使い分けることで、登場人物や場面の位置づけをより鮮明に描き出そうとしていたと結論づけたい。

鏑木清方と山東京伝

——近代の画家による京伝受容——

神戸大学 有澤 知世

山東京伝は戯作界参入以前、浮世絵師として北尾政演の名で活動しており、大田南畝『菊寿草』(安永十年(一七八一)刊)

「人情噺」の成立

東京大学（院）・日本学術振興会特別研究員（DC） 菅 野 竣 介

「絵師之部」において、北尾重政、鳥居清長に次ぐ高評価を得ている。鈴木重三「京伝と絵画」（『絵本と浮世絵』美術出版社、一九七九年）に指摘されるように、多方面にわたる彼の営為を理解するには、それらを支えた画業を重視する必要がある。

本発表では、日本画家・鐫木清方（明治十一―昭和四十七年二・七八―一九七三）の随筆・絵画・旧蔵書に注目し、近代の画家による政演の画業への評価と、京伝像の構築に迫る。

清方は、随筆「夜蕾亭雜記（五）」（『続こしかたの記』中央公論美術出版、一九六七年）で政演の画業を評価し、当世風俗を描く『四季交加』を特筆している。この評価は、『四季交加』が、江戸の名残を留める明治初期の東京風俗を描く清方にとって関心を同じくする題材であることに加え、当時の浮世絵研究において安永・寛政頃の作風が評価されたこと（村瀬可奈「江戸を振り返ること」（『美人画の時代』町田市立国際版画美術館、二〇一九年）と関連する。また清方は、第一回文展（昭和十二年（一九三五）の為に京伝の肖像画を描いており（未出展）、小下絵が鎌倉市鐫木清方記念美術館に現存する。本発表では、清方が制作にあたり先行の京伝肖像画を参照したことに加え、清方の旧蔵書や随筆類により、黄表紙等からも影響をうけ京伝像を構築したことを示す。その上で、京伝の再評価につなげた。

江戸落語は、落し噺（滑稽噺）と人情噺に大別される。本発表では「人情噺」という概念の成立過程を戯作や随筆、番付などの記述から検証した上で、幕末期における「人情噺」の実態や、「人情噺」との呼称が浸透した背景について検討する。

「人情」の語は、文化期に初代三笑亭可楽や初代朝寝房夢羅久の芸を評する際に使用されているが、彼らの芸は人間の様々な生活感情を穿つ滑稽性を旨としていた。一方「人情噺」の語が見られるのは、管見の限り弘化期以降である。例えば番付「一流噺の大世世」（弘化四年刊）には「人情咄 春風柳枝」とあり、系図『落語家奇奴部類』（二代目船遊亭扇橋編、弘化五年序）には「麗々亭柳橋」について「人情咄ヲ好クシ」とある。

特に春風柳枝（初代春風亭柳枝）は長編の「色談」（番付「高名時花」三福対「嘉永三年刊」）を得意とし、『みの古殺し』では聴き手の涙を誘ったとされる。その芸の特色は、素噺を基盤としつつも、声色や身振りといった音曲噺・芝居噺の要素を効果的に用い、登場人物の情態の描写に徹した点にある。

最幕末に「人情噺」の呼称が普及した背景には、天保期以降の人情本の流行が挙げられる。『只誠埃録』巻五十八には、天保十一年に為永春水が寄席出演をした際「人情咄」を謳ったこ

とが記されている。また、幕末期の「人情噺」には男女間の情愛を濃厚に描く点や、劇的な展開により観客の感情に訴える点など、「泣本」とも称された人情本と共通する要素が窺える。

故三馬門人勝亭三遊作『滑稽花の縁』について

二松学舎大学 吉 丸 雄 哉

勝亭三遊作『滑稽花の縁』（中本、二巻二冊、文政十二年刊、河村儀右衛門・柴屋文七版）は国書データベースに未登録の本で、管見の限り大阪公立大学吉沢コレクションの上冊と架蔵の下冊のみが存在する。勝亭三遊は故三馬門人を名乗るが、式亭三馬との交流の記録はなく、門人は自称だと思われる。平出鏗二郎「戯作者著述書目」（明治三十一）に、勝亭三遊が『花ノ宴』を著したほか、五作品の挿絵を担当したことが記される以外は、ほぼ未詳の人物である。

本作は、序文に「泣本の当世を廃」すと記すように、人情本隆盛下における滑稽回帰を目指したもので、こうした傾向は為永春水作『稽古三弦』（文政九年刊）など同時期に散見する。半七・愚庵・嘉兵衛の三人が鎌倉時代に仮託された隅田川東岸地域を巡る内容で、場所を固定した三馬の滑稽本よりも、十返舎一九作の江戸近郊を巡る滑稽本に近いが、これは鈴木圭一が指摘するように文政期滑稽本の特徴である（『中本研究』二〇一七）。

お花半七が登場するが作品のなかで二人のやりとりは少ない。凡例で三馬のように音声表記の注意を述べ、俗語の使用を明言しており、そこが三馬門人を称した理由かもしれない。三馬没後七年経っても滑稽本における三馬の盛名と影響力の強さがうかがわれる。

最初期の『和漢朗詠集』版本

——春日政治・和男文庫本（九州大学附属図書館蔵）について——

熊本学園大学 村上 義 明

九州大学附属図書館に蔵される春日政治・和男文庫本『和漢朗詠集』（大本・二巻二冊、以下「春日文庫本」）の上・下双方の巻末には、慶長十九年（一六一四）の年記が墨書され、また「宗助」の印章が確認できる。

近世期に版行された膨大な『和漢朗詠集』（以下「朗詠集」）の版種については、鈴木健一氏や藏中しのぶ氏の論考をはじめ、青裳堂書店古書目録『和漢朗詠集の版種』および『明星大学人文学部日本文化学科所蔵古典籍目録』によって、広く知られるようになった。これらの資料から、最古の朗詠集版本は、慶長五年（一六〇〇）のキリシタン版であり、整版本の登場は寛永五年（一六二八）ということが分かる。

無刊記本である春日文庫本は、かつて土井忠生氏や川瀬一馬氏によって少しく触れられたことから、早期の朗詠集版本として一部には認知されていたと思われるが、これまで詳細に検討されることがなかったと考えられる。そこで、同じく無刊記本ながら元和十年（一六二四）の識語を有する佐々木孝浩氏蔵本をはじめとする諸本との比較を行い、春日文庫本の初期の朗詠集版本としての位置づけを明らかにする。そのうえで印記の「宗助」や、近世初期の朗詠集の受容についても考察する。

『伊勢参宮名所図会』 諸本における板木分割所有の痕跡

信州大学 速 水 香 織

寛政九年刊『伊勢参宮名所図会』（部関月編、大本五巻六冊、附録二冊）は、板株の移動と板木修訂を繰り返しながら、寛政十一年本、享和二年本、文化十三年本、さらにその後修本、そして嘉永二年本と、数度に亘り印行されたことが確認できる。

これら諸本のうち、文化十三年河内屋太助修訂本には、巻四・五に丁全体を覆刻した箇所があるが、この覆刻丁は、同本以外には用いられた形跡がなく、前後の諸本では、初印と同一の板木が引き続き用いられている。また、寛政十一・享和二・文化十三年各本の間には、寛政十一年本で修訂された箇所が享和二

年本では初印の状態に戻るといった、先後関係の混乱する箇所が複数存在している。

本発表では、このような現象の背景に、初印刊行時において京都・大坂に拠点を置く複数軒の板元に分割所有されていた同書の板株の移動があることを指摘する。特に修訂箇所の逆転については、板株（板木）と共に初印の残部が移動し、新たに製本された本に混入した可能性を提示したい。

板木については、近年、永井一彰氏、金子貴昭氏らによる精緻な調査が進み、板木そのものと実際に印行された板本との関係や出版の経緯、さらには近世出版システムとの関連を視野に入れた研究が蓄積されている。こうした研究成果を踏まえ、『伊勢参宮名所図会』の調査から把握した各本の状態から窺われる板株の分割状況と移動について報告する。

『浄瑠璃物語』考

——中京大学図書館所蔵本を中心に——

早稲田大学演劇博物館招聘研究員 深 谷 大

『浄瑠璃物語』は浄瑠璃（節）の濫觴とされる物語で、十五世紀以来、語り物として語られ、操り浄瑠璃として演じられる一方、物語として読まれ、絵を伴って多角的に享受されてきた。『浄瑠璃物語』の諸本は、物語の基本的な筋は同じで、本文

の系統立ては可能であるが、各本が異なる構成や設定を持つ点に特徴がある。第一部「申し子」、第二部「矢作」、第三部「吹上」、第四部「浄瑠璃姫の最期」から成るが、信多純一が原態とする、四部全ての諸本内容を含み込む本は山崎美成旧蔵写本（所在不明）のみであり（『浄瑠璃御前物語の研究』、室木弥太郎が古態とする大鳥神社所蔵絵巻は第一部と第二部（『中世近世 日本芸能史の研究』、横山重が原形をみるサントリー美術館所蔵絵巻は第一・二・三部（『室町時代物語』、岩佐又兵衛工房制作のMOA美術館所蔵絵巻は第二・三・四部と、諸本で構成が異なる。

右の現状の中、四部門全てを持つ新たな伝本が出現した。中京大学図書館所蔵の特大型奈良絵本で、本の体裁、絵や本文の有り様から、天正後半から文禄・慶長頃の成立で、寛永までは下らない古い伝本である。語り物で、第四部最終の牛若の仇討ち（山崎本は文殊、MOA本は姫の母）がなく、牛若と母の、姫への弔いで終わるなど、設定や構成要素に違いがある。全体として、本文に視覚的表現が少なく、姫、母、牛若の幸せな世界が展開される。

本発表では、第一部と対をなす第四部を中心に、中京本の本文内容が古い様相を呈していると考えられることを提示する。

宝暦期における京都の歌舞伎に関する考察

——本居宣長『在京日記』を資料として——

奈良学國大学 川 端 咲 子

宝暦二年三月から宝暦七年十月まで、京都に滞在していた本居宣長の『在京日記』は、宝暦期の京都の様々な情報を読み取ることができる資料である。その中でも、芸能関連記事は、当時の京都の劇界を示す貴重な資料である。この『在京日記』の芸能記事は、すでに『義太夫年表』や『歌舞伎年表補訂考証』で、上演記録の傍証として利用されてきた。しかし、『在京日記』の芸能記事を中心にして考察したものは、ほとんどない。

ところで、京都の歌舞伎界は、宝暦を遡る享保ごろから低迷を続けていた。その中で、宝暦六年（前年十一月の顔見世以降）と宝暦七年は、それまでの低迷を払拭するような繁昌をみせている。このことは、役者評判記から窺えるのだが、その現象を『在京日記』の記事でより具体的に裏付けしていくことができる。また、『在京日記』の芸能記事の中には、宣長が伝聞したことを書き付けている所も少なくないが、この伝聞記事からは、役者評判記からは読み取れない事象を知ることができる。例えば、宝暦六年初狂言・二の替り狂言に関する記事からは、狂言を作る過程についての興味深い様相が浮かび上がる。

そこで、本発表では、あらためて『在京日記』芸能記事を読

むことにより、宝暦期の京都の歌舞伎を具体的に明らかにしていく。さらに、宣長が誰から情報を手に入れていたのかを考察する手がかりとして、『在京日記』の表現が役者評判記の表現と近似している点を指摘する。

『野郎ひなかた』（推定）復元考

——雛形と野郎評判記——

同志社女子大学名誉教授 廣 瀬 千紗子

元禄四年五月序『としの花』（稀書複製会本。半紙本一冊。無刊記。後補題簽）①は底本所在不明。異本に水谷不倒旧蔵本。『稀書解説』第三編は本書を「時代風俗に適応したる模様画に、人気役者の繡像を配して衆目を歎ばしむる」「衣裳模様の標本」とし、画工は吉田半兵衛と推定。見開き十六丁に十六名の京坂の役者と、その衣裳の雛形を対で収めるが、完本ではない。同工のフランス国立図書館デュレ・コレクション『野老役者』（外題墨書・原本未見）②は落丁・乱丁のある二冊本。上巻に役者二五名、下巻に序・役者の衣裳を収載。①②の關係は二〇二二年に拙稿「元禄期雛形本『野老役者』考——『としの花』への変貌」で②↓①への改装と考証したが、先年『としの花』に未収の役者九名を載せる端本③が新出。原本の復元が可能となり、右の考証を①↓②への改装と訂正する。

貞享・元禄期の評判記は容色評から演技評へと推移する。元禄四年刊『蓑張草』の役者十四名は『としの花』と共通。同六年刊『雨夜三盃機嫌』、同『風流體』の図様も同工である。あわせて貞享四年刊、吉田半兵衛画『女用訓蒙図彙』巻三・四を参照すれば、雛形と野郎評判記は隣接しつつ重なるが、書籍目録の部類は「雛形並絵本」「好色並樂事」の別になる。評判記は絵本でもあり得たが、この後、判型は横本となり演技評が中心となる。『としの花』はその分岐点にあり、元禄期の書籍目録に見える『野郎ひなかた』二冊がその原本かと推定する。

シンポジウム要旨

「文学史」の可能性

——十七世紀を端緒として——

「文学史」とひとくちに言っても、簡単に説明がつくものではない。「文学史」には、記述者個人の「文学史」観が反映される。「文学史」を「和歌史」「俳諧史」「小説史」「学芸史」などと置き換えても同様である。本シンポジウムでは、十七世紀を中心に洞察を重ね「文学史」を構想し続けてきたパネリストに、それぞれの「文学史」観を持ち寄っていただき、議論を深めてみたい。

ただし、「文学」とは何か、「文学」の指す範囲はどこまでか、また近世文学通史をどう構想すべきかについては、今回は議論の中心とはしない。各パネリストが、各自の「文学史」観に基づいて、できるだけ具体的な事例に即して、「文学史」を意識した提言を行い、それに基づいて意見交換をし、そこから個別の事例を超えて普遍的な意味での「文学史」の可能性を拓く議論に繋げたい。

はじめに、十七世紀を中心に、小説史・和歌史・俳諧史・学芸史について構想されてきた四人のパネリストに提言をしていただき、次に、コメンテーターにコメントしていただき、それらを踏まえて、総合討論を行う。それぞれの発表は具体的な事

例に基づいているが、各パネリストの提言は普遍的な「文学史」の問題に関わる。十七世紀「文学史」の提言を端緒として、フロアにいらつしやる十八・十九世紀の文学研究者の方々もぜひ議論に参加していただきたいと考えている。

混沌とした小説

早稲田大学名誉教授 中 嶋 隆

混沌とした散文から浮き上がる十七世紀の小説様式について述べる。十七世紀前半は、文化を組織に譬えるなら、出版メディアの紡ぐ糸が徐々に太くなり、いわば時代色となった時期である。そこから①「知」の均質化、②堂上（とうしよう）／地下（じげ）のヒエラルキーの変質という文化現象が生じた。中世以前には堂上文化が独占した物語や和歌が、出版物を介して地下層の憧憬の対象となった。一方では、ジャンル分けしがたい、雑多な様式が複綜した散文が流通した。「仮名草子」という概念がきわめて曖昧なのは、そのせいである。『好色一代男』登場以降は、小説様式が定着したかに見えるが、西鶴作品とて、混沌とした散文から起ち上がってきたという出自をもつ。本報告では、様式の複綜した散文・韻文の例として『傾城百人一首』をとりあげたい。

和歌史の近世前期

京都女子大学 大谷 俊太

和歌には道理と余情という二つの要素がある。余情が後退し道理が目立つのが近世であると感じた。あるいは和歌の本意と趣向という要素で言えば、本意を趣向で以て如何に表現するかが和歌である。趣向がより複雑になるか、本意の外部にはみ出して行くのが近世か。また、近世に於いても和歌はみやびなものであれば、みやびとは教養と機転であり、その機転の意外性は得てして本意の外部に飛び出さないか。上記の事柄に他分野との関わりを見出すことができるのか、教えを乞いたい。

中近世移行期の社会における連歌俳諧史の動態

山口大学 尾崎 千佳

島津忠夫「連歌と俳諧と——紹巴以後に関する一考察——」（『国語国文』一九六五年三月）は、十七世紀を連歌と俳諧の併存した時代として捉え、西山宗因の連歌に蕉門俳諧の先駆的性格を認めて高く評価した。しかし、宗因を連歌俳諧史上に位置づけるために必要な比較の対象は、蕉門ではなく、同時代の連歌師・俳諧師である。豊臣政権期に権力と密着して獲得した地位と家門を徳川政権の終焉まで保ち続けた里村家の存在は、中近世移

行期における連歌俳諧史の実相究明にとつて、とりわけ重要であろう。本発表では、里村家連歌師の諸活動を参照することで連歌師宗因における俳諧兼業の意味を明確化し、作者を社会的存在と見る視点を導入した文学史研究の可能性を探りたい。

〈そらごと〉の時代

——十七世紀文学論の一側面——

九州大学 川平 敏文

十七世紀の和歌や俳諧などで、〈まこと〉の理念が追求されたことはよく知られている。しかし同時にこの時代は、〈そらごと〉を肯定する理念も発達したのではないか。たとえば『伊勢物語』や『源氏物語』は古来、〈虚・実〉が問題とされてきたが、十七世紀になると、〈実〉の部分にさほど重きを置かない注釈書が現れ始める。これは談林俳諧の岡西惟中が、「掻いて回るほどの偽を言ひ続けるを、この道の骨子と思ふべし」（『俳諧蒙求』）と言ったこととも連動していよう。俳諧はその後、蕉門俳論のなかで〈まこと〉説へと移行したように見えるが、〈そらごと〉が否定されたわけではない。また物語における〈そらごと〉の評価も、古典注釈史において定着していく。



JR 京都駅（地下鉄京都駅）・阪急烏丸駅（地下鉄四条駅）からのアクセス

- ・地下鉄「京都」駅（地下鉄「四条」駅）乗車→「国際会館」駅下車
→京都バス（40 系統）で「京都産業大学前」下車
- ・地下鉄「京都」駅（地下鉄「四条」駅）乗車→「北大路」駅下車
→市バス（北 3 号系統）または京都バスで「京都産大前」下車

アクセスの詳細および地下鉄・バスの時刻表は、
<https://www.kyoto-su.ac.jp/access/> を参照してください。

学内および主要バス乗り場



国際会館駅前バスターミナル
2番乗り場



地下鉄北大路バスターミナル
地下2階A乗り場



京阪出町柳駅バスターミナル

